

## 二つのパイプクラブの誕生秘話

- **パイプ仲間が増える経緯**：私は昭和32年(1957年)から銀座に勤め始めました。当時の東海道線は1時間に1本。ものすごく混んでいて、藤沢から乗るのは大変な苦勞でした。また帰りはさらに大変で、最終列車は特に混み、時には連結器のある車両の梯子に登り、後ろから登ってくる人もあるのでどんどん上に押し上げられ、とうとう屋根から上に顔が出て、雪が降ってきて雪まみれになり帰った事もありました。当時の上り列車の最後尾には郵便車というものがつながれており、それを藤沢で開放してもらい乗り込みましたが、だんだんとそれはスモーキングカーになってしまいました。当時は全車両とも喫煙OKだったので、タバコをおおっぴらに吸っていましたが、シガレットでは火傷や灰などで周りの人に迷惑をかけることを懸念してだんだんとパイプを吸う人が増えてきて、いつしかその人たち顔なじみとなりました。その頃の湘南地方には戦災で罹災された人たちが移り住み多くの有名人が居を構えており、それらの人々と当時約一時間の道中を列車内で、どこの誰とも判らず雑談をして過ごしたものです。藤沢で乗るとき、一人が後ろ向きになり、その人を押し込むかたちで乗り込み、真ん中の空いているところまで行きパイプをふかしたりしました。これをブルドーザー作戦などと称したりしていました。また当時多摩川の六郷橋に山武ハネウエルが大きな温度計を看板にして立てていましたが、藤沢で乗るとその日の温度を予想して投票し、一番外れた人が、コーヒー代を払うと言う習慣ができ、「ランブル」や「園」で一休みし、それから出勤するというのが常となり、こうしてパイプ仲間が出来て行きました。
- **日本パイプクラブの始まり**：戦後すぐに写真を主体としたサン写真新聞と言うのがありました。毎日新聞の傘下でありタブロイド版の新聞だったと思います。その社長の石川欣一氏がパイプを吸い、サンや毎日新聞などのパイプスモーカーが彼の周りに集まりだしました。戦後はタバコは配給制でしたが、専売局(公社になる以前の組織で、タバコ、塩、樟脳、酒の製造・流通を独占的に支配していた)の工場は多くが戦災に合い、シガレットが作れず、そのためタバコは葉と紙が配給されていました。自宅でタバコを苦心して巻いていましたが、会社に持ってゆくとねだられて取られてしまい、折角の苦勞が役に立ちませんでした。それでは紙巻にせず、パイプで吸えばよいのではということで、パイプが流行り出しました、これが第1次のパイプブームです。これに目を付けたのが専売局でした。タバコの宣伝をうまく行い、タバコの売上促進により税収の増大の図りたかったのです。そしてそれを助けたのがNHKです。当時NHKの番組に出演する知名度の高い人たちの中にパイプ愛好者が多くいて、その人たちを利用してタバコの宣伝をやろうと考え出したわけです。“今日も元気だタバコはうまい”とか“タバコは健康のバロメーター”などのコマーシャルの名せりふが出たのもその頃でしょう。NHKは全国各地で番組の公開録音

をやっていましたが、専売局はそれとタイアップしてタバコの宣伝をやり、一方そのリハーサルに専売局は工場の人たちの家族を招待して、専売局は表向きの宣伝とともに、搦め手から労組の鎮撫工作もやっていたらしいです。こうした動きの受け皿として毎日新聞やNHKに集まっていたパイプ愛好家の知名人たちを組織して、専売局肝いりの日本パイプクラブが作られました。

- **日本パイプクラブのことなど**：専売局の呼びかけに集まったのは石川欣一、辰野隆(ゆたか)、渡辺紳一郎、石黒敬七、徳川夢声、式場隆三郎、太田黒元雄、玉川一郎、小野佐世男、林謙一、中村研一、藤原洸、宮田重雄、高橋龍太郎などなどの各氏でした。私も世話係りとしてクラブの活動を手伝ったものです。NHKの活動で各地を飛び回ったりしているうちに、日本パイプクラブはすっかり有名になりました。当時人気の高かった番組に「兼高かおる世界の旅」がありましたが、オランダのKLM航空会社の南回り世界一周航路開設により、兼高かおるさんが短時間世界一周記録を達成し、KLM主催で記念パーティが開かれました。日本パイプクラブのメンバーも招待され、席上KLMからクレイパイプが寄贈されました。その際KLMの支配人の挨拶の中で、西欧各国ではロングバーニングのコンテストがあると話され、急遽、このクレイパイプでスモーキングコンテストをやろうということになりました。日本におけるパイプスモーキングコンテストの嚆矢となったものです。

第1回のパイプスモーキングコンテストは目黒の八芳園で開催され、約50人が集まり盛大に行われました。その後コンテストは数回開かれましたが、昭和29年のあるコンテストのその夜、会員の小野佐世男氏が亡くなってしまいました。死因とコンテストとの因果関係は不明でしたが、世間からは非難轟々となり、やがて徳川夢声氏などが会合に出席しなくなり、日本パイプクラブのメンバーは最後には玉川一郎氏一人になってしまいました。ある日、玉川氏がやってきて日本パイプクラブの名前を返上しようではないかと言い出され、丁度その頃の専売公社も、もう余り宣伝しなくてもタバコは売れると考えて、手を引きたがっていたものですから、渡りに舟となり、昭和30年頃、日本パイプクラブは終焉を迎え、解散となりました。

- **日本パイプスモーカーズクラブの旗揚げ**：湘南からの通勤仲間にパイプの輪が広がってきたこととお話しましたが、やがてパイプクラブを旗揚げしようではないかとの話が出てきました。楨さん(マナスルに行った)、岡部さん(登山家画家・山と溪谷社)、大谷さん(NHK・メキシコ五輪の技術顧問)、河合さん(写真家・報知新聞)などが集まり、これに加えて岡部さん、河合さん、山と溪谷社の三つのルートからも話が上がってきました。それを纏めたのが岡部さんです。新しいクラブは専売公社丸抱えでは面白くない、全く独立した民間のものにしようなどと夢を語り合いました。

クラブが設立されるまでには話が出てから5年もかかりましたが、ついにクラブが誕生しました。官にたよらず民間の力で、民間で運営しようと決め、業界会関係者は入れませんでした。名前も製造業者ではない、“吸う人”の集まりということで“スモーカー”とい

う言葉が名称に入れられ“日本パイプスモーカーズクラブ”と命名されました。岡部さんの主導で、こうして誕生したクラブには、創立メンバーには前述の人たち以外にも、小田急の宣伝担当の根本さん、京浜急行の木俣さんなどの私鉄関係者も入れられ、これは後でクラブの恒例行事となった旅行会では大いに役立ったようです。私にも声がかかりましたが、前のクラブの関係もあり、販売業者でもあるので入らないといいましたが、世話人をやれということで参加することになりました。

1967(昭和42)年4月26日に設立総会が開かれました。運営は何事も平等にということで、テーブルの席順も番号で決め、マッチ箱にナンバーをつけてくじ引きし、引いた番号で着席するとともに、それが会員番号になりました。私は最後に残ったマッチ箱をもらいましたが、それが1番でした。それで私の会員番号が1番に決まったわけです。

それから40年、今では創立総会に集まった13名の内、残ったメンバーはくすしくも番号の両端の1番の私と13人中の13番の関口さんの二人となりました。(河合さんは退会されましたがご健在です)何か不思議な縁です。

J P S Cではその後、“P I P E”誌をクラブで発行し、メンバーを募集したこともあり、会員が大幅に増えました。日本たばこの関係者も、業界関係者も加わりました。1973年(昭和48年)に日本から初めて世界大会に参加しましたが、それを機縁に世界大会を日本で開催することが現地で急に決まりました。その受け皿として日本パイプクラブ連盟が大騒ぎをして設立され、各地にも多くのクラブが設立され、パイプクラブの活動が隆盛となりました。

しかし、J P S Cがこんなに長く続くとは思いませんでした。これだけ長く続くのは趣味として良いことだからだと思います。40年も続いたことは大いに誇りにして世の中に宣伝しなくてはいけないのではないかと思います。

内藤さんのお話は以上です。以下質問答えられて。

- 銀座は明治5年に大火で消失し、明治10(1877)年に東京市によって赤レンガに作り変えられました。東京・横浜を結ぶ馬車鉄道の開通にあわせ、玄関口として整備されたものです。しかし当時の銀座は、家賃が高い、湿気が多い、おまけに幽霊が出るとの噂話などによりテナントが集まりませんでした。とうとう東京市は各県に割り当てて、補助金も出し、出店者を募りました。それに応じて佐賀県の菊水という佐賀タバコの元売り捌き業をやっていた人が出店しました。とりしきっていた人は神官さんで、湊川神社の流れを汲む人だったので、タバコに菊水と命名しトレードマークは楠神社と全く同じにしていました。
- 明治36年に祖母がそのブランドを買い取り、店名を菊水としたものです。トレードマークも変えずに引き続いて使っていましたが、戦時中は、いろいろと嫌がらせを言われ、マークに葉っぱを付れたり、菊の花弁の数も16枚にしてはいけないといろいろと気を使いました。それが私ども銀座に居を構えるに至った経緯です。  
第2次大戦後銀座も焼け野原になり、配給タバコの扱い店はたったの7軒でした。サン写

真新聞は米軍カメラマンから撮影したフィルムを手にいれ、自社の現像設備、輪転機を使い、現像焼き増しをして絵葉書にして売っていました。あのミズリー号の調印式も2時間後には絵葉書になって売られたそうです。サン写真は菊水の前を売り場にしていたので、お互いに助かったそうです。今の銀座は大きなビルの改築話が持ち上がりいろいろと難しい話が起こっています。(注=内藤さんは銀座の町内会連合会の会長をされておられます)。

- その頃タバコ関係の大きな会社は3軒あり、岩谷商会(天狗煙草)、千葉商店(主に口つき煙草)が工場と販売店を銀座に持ち、村井兄弟店(アメリカン煙草代理店)が札の辻にいました。日清戦争の後、軍備調達資金獲得のため1904年に専売制度が設けられ、タバコ、酒、塩、樟脳が専売品となりました。第2次大戦後、樟脳、酒、塩が順次専売制から外されましたが、タバコは売上高が多く、高い税率の故か最後まで専売制が維持されました。
- パイプは、戦前は全部輸入でしたが、戦後、フカシロがパイプづくりを始めました。フカシロではご長男(守二郎)が卸売りをされ、次男(二郎)、三男(三之助)が製造を担当されました。ブライヤーの原木などはなく、いろいろ試した挙句、三宅島原産のしゃくなげ系のビランの木の根(1説には木のこぶ)を材料にして作りました。日本パイプクラブの人たちもこれを愛用し、オリエントブライヤーと称して使っていた時代もあります。
- シガレットとパイプタバコはどちらが良いかとしばしば話題になります。丁度40年ほど前の頃、シガレットは肺癌になりやすいとの噂が広がり、パイプに転向する人が増え、パイプがブームになりました。これが第2次パイプブームです。シガレットとパイプを比較して明らかなことは、燃焼速度が違うこと(シガレットは早い)でしょう。フィルター付きになると更に強く吸うようになります。また煙の成分が違うともいわれます。(シガレットは酸性で深く吸い込める、パイプはアルカリ性でむせて深くすえないから体にダメージが少ない)。50年代に公衆衛生院は肺に入るタバコの煙は200数十種類もあり、その成分は分析できない、タバコは煙を肺に入れることになるが、癌との直接の因果関係は見つからないとしました。各地の保健所で野犬を調査したところ、大部分の野犬に肺癌症状があり、犬はタバコを吸わないのに肺癌症状があるのは何故でしょうか？  
結局タバコは産業間の争いに敗れたわけです。スモーキングコンテストは、ゆっくりと極めて少量ずつタバコを吸うのですから、害にならない吸い方として奨励すべきであります。
- パイプの将来：タバコ離れがきわめて激しいのは事実です。タバコが嫌がれるのは喫煙者のマナーが悪いからです。銀座には灰皿をところどころに置いていますが、シガレット愛煙者の歩きタバコとポイ捨てが減らない。それに比べるとパイプは灰皿付きです。パイプの方が良いとうたって欲しいと思います。かつてパイプは男のおしゃぶりといった人いますが、良いイメージでパイプを流行らせたいものです。

内藤さんにも見ていただきましたが、内藤さんからお借りした父上・内藤長一様遺稿集“白い花”と銀座6丁目会発行の“銀座6丁目小史”を参考にさせていただきました。